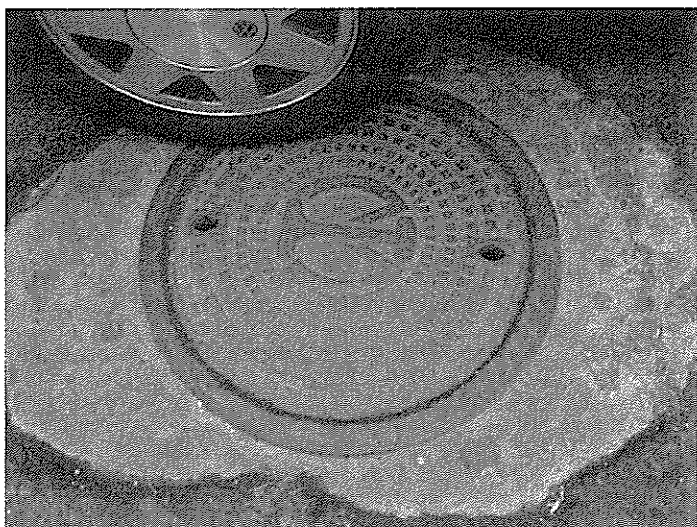


コラム

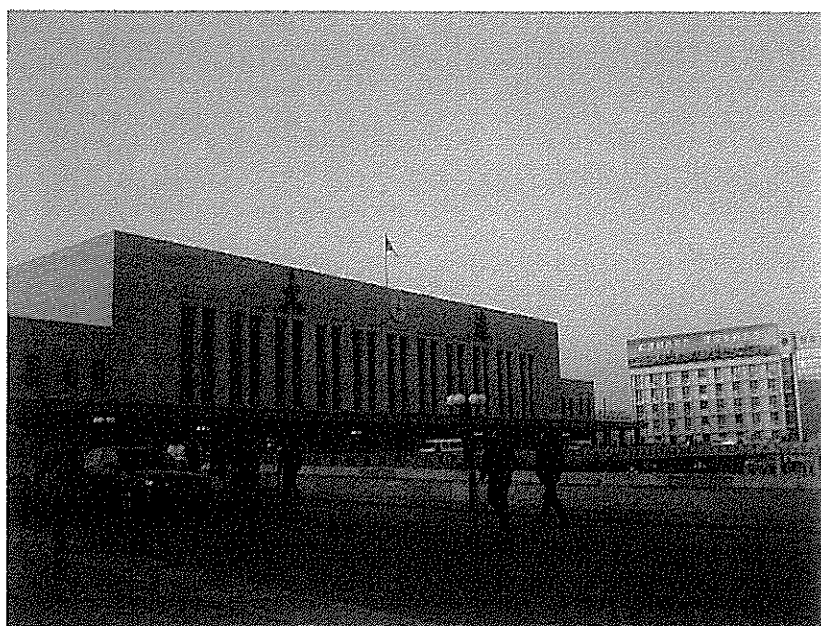


杜海樹

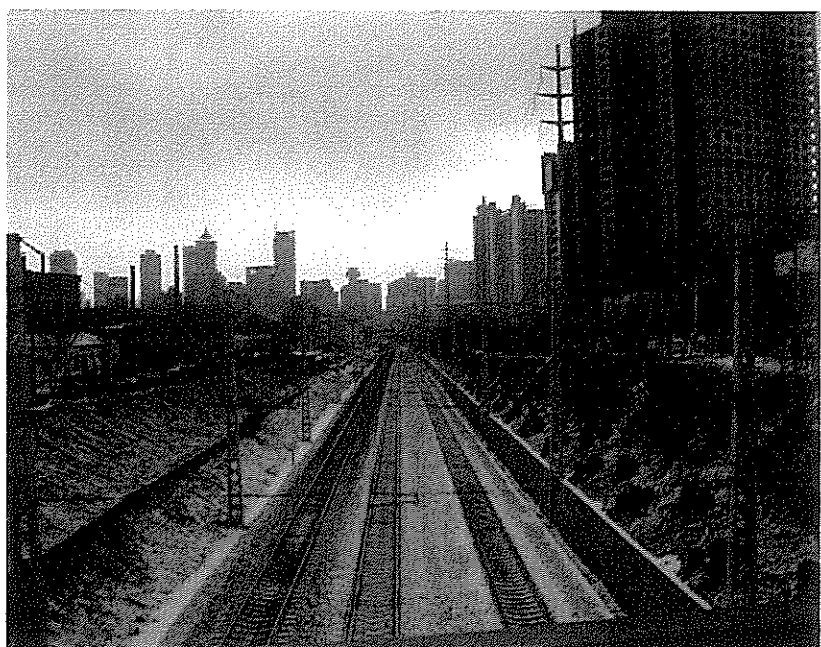
父と大連と満鉄



▲満鉄時代のマンホールの蓋



▲現在の大連駅



▲線路はハルピンへと続いている

それでも点と点の話をつなぎ合わせていくと、それなりのイメージは浮かんで来るものだ。
戦前当初は、メイドさんを雇い入れ口シア風の家に住んでいたこと、父は大連一中に通っていたこと、日本人街が形成され神社や温泉も作られていた等々であり、日本本土に比べてかなり贅沢な暮らし

しをしていたと思われる。それが、敗戦となり、一挙に追われる身となった。しかし、本土に引き上げてきても満州時代の暮らしが忘れられなかったようであった。餃子のことを豚饅頭と呼んで食べ続けた。名前も中国読みを使用するなどしていたことから、良い思い出の方が強かったであろうことが容易に想像できた。よ

く、植民地での生活と言うと、支配する側される側の血で血を洗う関係とも思われがちだが、個々の暮らしの場面では必ずしもそうではなかったようなのだ。ただし、戦後数十年が経過して、当時を偲ぶ日本人会はあちこちで作られて来たが、当時のメイドさんなど日本人の暮らしを支えて来た中国の方々との相互交流

「黎明を 破りて鐘は 朝を告げぬ 満蒙の野に 栄は共に 共にす希望 知れ高梁の波溢るる如く 満ちたるを 曠野 曠野 日は昇る 曠野に」という一節を見て、おわかりになる方がいらつしやるであろうか？実はこの一節、戦前

の満鉄（南満洲鉄道株式会社）の社歌なのだ。

満鉄は今となっては戦前の歴史の一部になりつつあるが、筆者にとっては、父が旧満州（現在の中国遼寧省瓦房店市：瓦房店市は大連市の北方に位置）の生

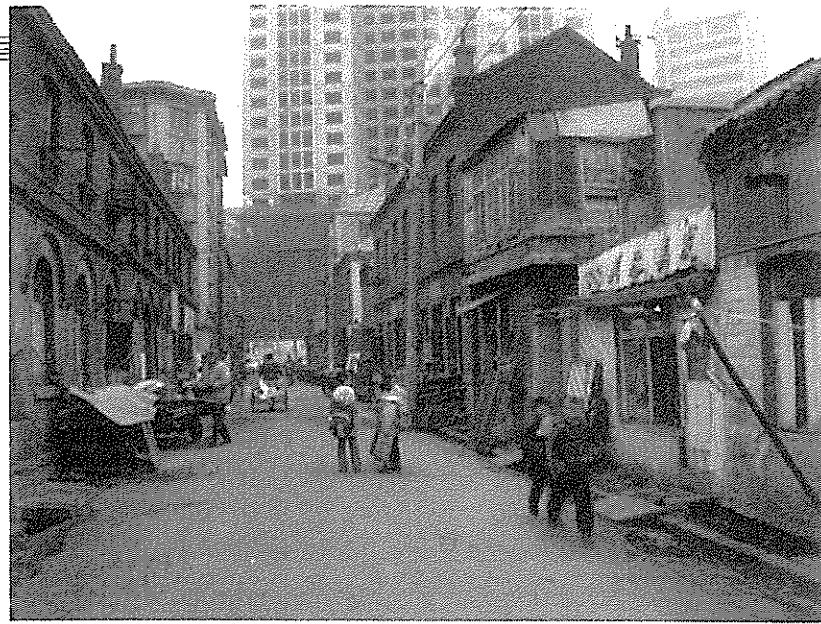


▲旧満鉄本社跡

れであり、祖父が満鉄に勤務していたこと等から、非常に身近な所であり続けている。祖父は戦前に他界しているのですが、詳しいことは一切わからないが、それでも有名な特急「あじあ号」を運転していた可能性も高く、日中間の様々な歴史に大きく関わっていたであろうことは容易に想像がついている。

そんな旧満州の地から本土に引き上げて今日まで暮らして来た父が先月他界した。83年の生涯であった。父は生前、満州時代のことを断片的に語ったことはあつたが、体系的に話をしたことは一度もなかったため、詳しいことは分からないままだが、

▶大連市内の下町の様子

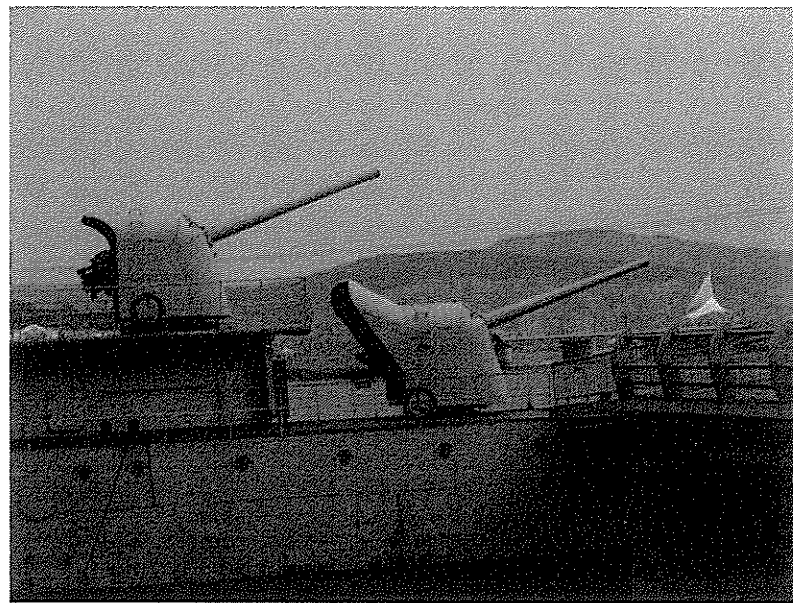


▼戦前の日本人家屋も残っている

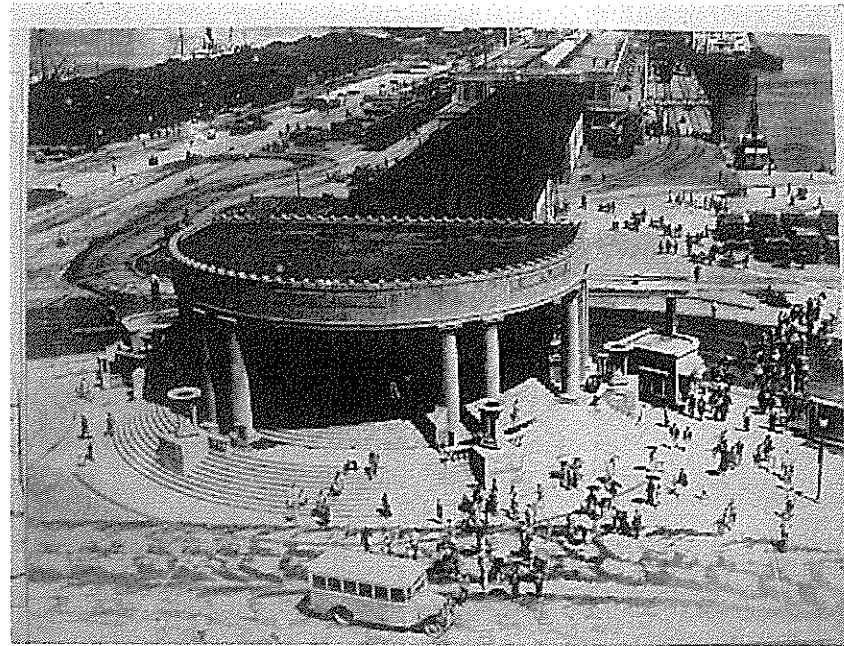


くのであろうが、その土地に生きた人々の足跡を消さないで伝えていく良い方法はないものであろうか。人の死をもって歴史が一代で途絶えてしまうのでは、戦争の歴史も伝わってはいかない。歴史や思想はF1(1代品種)では困る。加害・

被害双方の歴史を人の一生を超えて伝えていく方法が問われているように思えてならない。



▲河口には所々戦艦が停泊している



▲満州時代の大連港



▲当時の埠頭が残っている現在の大連港

であろうか？満鉄全盛時の特急「あじあ号」は有名だが、その満鉄に接続すべく釜山―新京(長春)間に急行「ひかり号」「のぞみ号」という列車が走っていたのであった。現在、中国大連市を訪れると、旧満鉄本社跡は大連鉄道有限責任会社の事務所となっているが、建物は建て替えられており当時のものは何も残されていない。唯一残されているものはマンホールの蓋一つだとされている。時間の経過とともに、過去の歴史は次第に遠いものへとなってい

等の話をほとんど耳にしないことから、このあたりが限界かと、支配した側の一方的ナルシズムも拭い切れていないのかと想像する所もある。
いつの時代でも言えることだが、支配者側と言うものは身勝手であることが非常に多い。満州では国歌すら1932年、1933年から42年、1942年から45

年と3度も変えさせられていたようだ。「天地内有了新滿洲 新滿洲便之新天地 頂天立地無苦無憂 造成我國家 唯有親愛並無怨仇 人民三千万人民三千万 縦加十倍也得自由 重仁義尚礼讓使我身修 家已齋國已治此外何求」(仁義を大切にし礼儀を尽くせば家も国も全てが治まり他に何も求めるものはない)とい

う歌は儒教色が強いとされ変えさせられたのだという。
また、過去の思い出に浸るといっても少なくはないようだ。戦後の国鉄全盛時代、日本では夢の超特急「ひかり号」という名前が一世を風靡したわけであるが、実はこの名前が、満州時代の急行列車の名前でもあったことはご存じ